

## 慣用句的意味の成立要因について

伊 藤 眞

### 0. はじめに

慣用句を通常の語結合と区別する大きな特徴のひとつとして、慣用句が、それぞれの構成要素本来の意味を組み合わせたものとは異なる、慣用句独自の意味をもつということを挙げることができる。この特徴は、一般に、イディオム性 (Idiomatizität) と呼ばれ、慣用句の重要な特徴のひとつに数えられている。<sup>1</sup> すなわち慣用句的な意味とは、ある語結合がテキストの中で表す特別な意味と理解することができる。ところで慣用句的な意味と構成要素本来の意味との関係に目を向けてみると、その関係は一定ではなく、それぞれの慣用句によって様々である。例えば以下の例を見てみよう。

#### (1) (nicht) zu Stuhle kommen

Im Unterschied zu der Fast-Euphorie der Besucher herrscht bei denen, die übersiedeln wollen, eine gedämpfte Stimmung. Manchem, der sich spontan entschlossen hat, "weg zu machen", kommen im Aufnahmelager erste Zweifel. „Unter ihnen sind viele Leute, die sich drüben nicht zurechtgefunden haben“, sagt ein Mitarbeiter in Marienfelde. „Und ich schätze, daß sie auch hier nicht *zu Stuhle kommen* werden. Doch mehr, als sie auf die Schwierigkeiten hinweisen, können wir nicht tun.“ Als sehr problematisch erweist sich auch die Auszahlung des Begrüßungsgeldes.

Mannheimer Morgen, 11.11.1989, Weltwissen; Deutsch-deutsche Party

上記のテキストの中で、ドイツ語慣用句(1) (nicht) zu Stuhle kommenは、*mit etwas (nicht) fertig werden* という意味を表すが、この慣用句の表す意

味は、慣用句を構成する要素の表す本来の意味「椅子のところに来る(来ない)」とは何ら関連性は認められない。すなわちこの慣用句の場合、慣用句的な意味と構成要素の意味との間には、何ら連想関係が存在しないといえることができる。このことは、次の日本語慣用句についても当てはまる。

### (2) 馬の骨

私が結婚したころ書いて、出しそびれたらしい母の手紙を見つけた。結婚式の前夜、「私を捨てて男を取るの？」と泣いた激しい母は今、ベッドに横たわったままである。どこの“馬の骨”ともわからぬ男が懸命に母を介護しているのをわかっているのか、それも不明である。私は馬の骨に甘えて、最愛の母との限りある日々を過ごしている。新婚当時「忙しくても玄関の明かりと出迎えが欲しいな」と言った夫の言葉の意味がわかった。明かりも馬の骨も温かくて優しい。

毎日新聞 1995.10.19 朝刊 19頁

上記のテキストの中で、日本語慣用句「馬の骨」は、「家柄、生まれ育ちなど素性のわからない者」を意味し、そのような者を見下げていう場合に用いられるが、構成要素として用いられている「馬」や「骨」から慣用句としての意味を言語学的に導き出すのは容易ではない。このように、慣用句の表す意味と慣用句の構成要素の意味との間に、何ら連想関係の認められないような慣用句は、一般に、イディオム性の高い、あるいは完全にイディオム化した慣用句 (voll-idiomatisierte Phraseologismen) と呼ばれる。

### (3) ein wandelndes Lexikon

Roland Paul, der Volkskundler mit Leib und Seele, der hierzu viel zusammentrug, hat seinen Arbeitsplatz bei der Heimatkundestelle im west-pfälzischen Kaiserslautern, einer Einrichtung des Bezirksverbandes Pfalz, dessen Vorsitzender Oberbürgermeister Dr. Werner Ludwig ist. Der 38jährige Paul ist ein „*wandelndes Lexikon*“, und die Amtsstuben im Benzining 6 entpuppen sich als wahre Fundgruben.  
(Mannheimer Morgen, 17.07.1989, Lokales)

## (4) 手を汚す

いくら義理があるといってもそんなことで手を汚すこともあるまいに。

井上 (1992) 261頁

上述の慣用句(1)及び(2)に対し、ドイツ語慣用句(3) *ein wandelndes Lexikon* では、慣用句の構成要素本来の意味「歩く事典」から慣用句的な意味「非常に広い知識を持っている、生き字引」を、ある程度、推測することができる。同様に日本語慣用句(4)「手を汚す」においても、構成要素の意味と慣用句の表す意味「好ましくないこと、つまらないことを直接自分が行う」との間には、何らかの連想関係を認めることが可能である。<sup>2</sup> このように、構成要素本来の意味と慣用句的な意味との間に関連性を認めることができるような慣用句は、イディオム性の低い、あるいは部分的にイディオム化した慣用句 (*teilidiomatisierte Phraseologismen*) と見なされる。

上述のように、慣用句的な意味と構成要素本来の意味との関連性については、さまざまな段階を設定することができるが、このイディオム性の程度を決定するための客観的な基準を設けるのは容易なことではない。慣用句的な意味と構成要素本来の意味とのあいだに何らかの関連性が存在するか、あるいは関連性が存在する場合、その関連性がどの程度のものであるかを判断するには、ある程度、主観に頼らざるを得ないことも厳然たる事実である。従って、イディオム性という特徴は、個々の慣用句において絶対的な特徴ではなく、あくまでも他の慣用句との比較から判断される、相対的な特徴と理解する必要がある。<sup>3</sup>

本論では、慣用句の表す意味について考察するが、慣用句の意味と構成要素本来の意味との関連性の程度を判断する基準を設けることが考察の中心に置かれるのではなく、慣用句的な意味が成立する過程、また、慣用句的意味の成立にはどのような要因が関与しているかに主眼を置いて検討することにした。

## 1. 慣用句的な意味の成立要因

## 1.1 構成要素の比喩性

慣用句としての意味を成立させている要因を検討してみよう。

(5) *die richtige Nase haben*

Einige DDR-Familien, die nicht in die bundesdeutsche Botschaft in

Warschau geflüchtet waren, sind noch in Polen in den Zug nach Helmstedt eingestiegen. Es habe sich um Leute gehandelt, „die offenbar *die richtige Nase* für Kurs und Zeit *hatten*“, sagte der Staatssekretär im Auswärtigen Amt, Jürgen Sudhoff, gestern abend in Helmstedt. Beim Durchqueren der DDR hat es entlang der Strecke Sympathiebekundungen von DDR-Bürgern gegeben.

(Mannheimer Morgen, 02. 10. 1989, Politik)

上記の慣用句 *die richtige Nase haben* は、テキストの中で *etwas richtig voraussehen, ausfindig machen* という意味を表しているが、この慣用句の意味は、もっぱら構成要素である名詞 *Nase* の比喩的な意味から生じていると考えることができる。というのは、この慣用句の構成要素である動詞 *haben* は、上記のテキストからも明らかのように、動詞 *haben* の本来の意味をそのまま示しており、慣用句としての意味の中で中核的な意味的機能を果たしているとは考えにくい。このことから、*die richtige Nase haben* という慣用句の表す意味においては、名詞 *Nase* の表す比喩的な意味及び形容詞である *richtig* が中心的な役割を果たしていると考えることができる。この慣用句では、*Nase* は、「あることを正確に見極めることができる能力をもつ部分」という比喩的意味を表していると考えることができる。

中核的な構成要素の比喩的な意味に基づいて慣用句の意味が生じている例は、日本語慣用句にも認められる。

#### (6) 鼻が利く

彼は**鼻が利く**ので、彼の前では商談をするのはやめておこう。

集英社 (1991) 307頁

この日本語慣用句は、ドイツ語慣用句と同様に、「鼻」という構成要素をもつものであるが、慣用句の表す意味も「隠し事などを鋭く感じ取る、利益の得られそうなことに敏感である」という類似した意味を表している。この日本語慣用句においても、構成要素である「鼻」が、慣用句の表す意味の中で中心的な役割を果たしており、ここでも鼻は、「ある事柄を敏感に感じ取る器官」という比喩性を示しているといえる。

## (7) 腕を競う

フジの人気深夜番組「料理の鉄人」が、中華料理の本場・香港へ“出張”。鉄人道場六三郎らが現地の名人と腕を競った。この模様は三十一日午後九時三分から十一時三十七分まで特番「完全なる料理の鉄人香港決戦」としてゴールデン枠で放送される。

毎日新聞 1995.3.31 朝刊 29頁

この日本語慣用句は、「自分のもつ能力や技能を競い合う」を意味しているが、「腕」を構成要素にもつ慣用句として、上記の「腕を競う」以外にも、「腕が上がる」(技量の程度が今までよりいっそう高くなる)、「腕をふるう」(何かをする際に、身につけた能力・技術を存分に発揮する)、「腕が利く」(何かに優れた技術を発揮することができる)、「腕を磨く」などがある。これらの慣用句の表す意味と、構成要素との関係から、慣用句の表す意味の中で中核的な役割を果たしているのは「腕」という構成要素であり、しかも上記の慣用句の中で、「腕」という構成要素は「技術・技量」という共通する比喩的意味を示していると考えられる。

ところで、慣用句の主要な構成要素である名詞の比喩性により慣用句的な意味が生じていると考えられる場合、慣用句の構成要素である動詞は、一般に、ドイツ語慣用句の場合には、sein, haben, kommen, bringenなどが多く認められる。これらの動詞は、慣用句の表す意味の中で意味的に中核的な機能を果たしているのではなく、もっぱら文法的な機能を果たしているといえる。また、構成要素である名詞がどのような比喩的意味を表すかは、それぞれの言語の民俗的・文化的影響を少なからず受けている場合が多い。日本語とドイツ語という、歴史的・文化的に大きく異なる発展段階を経てきた言語では、名詞の比喩的意味についても大きな違いのあることは容易に想像される。その一方で、上述の慣用句以外にも、両言語の間に構成要素の比喩性に関してある種の類似性の認められる場合がある。

## (8) ein junges Blut

Binnen weniger Monate hat er erstaunlich gut Deutsch gelernt, auch wenn er die Beantwortung von Fragen weitgehend seinen Vorstandskollegen überließ. Insgesamt kommt mehr junges Blut in die Führungsriege, sie vermittelt nicht mehr so sehr den Eindruck einer

„Altherrenriege“ wie in früheren Jahren. Die Zufriedenheit der Kunden nannte Hughes als wichtigstes strategisches Ziel in den 90er Jahren.

(Mannheimer Morgen, 21.06.1989, Wirtschaft)

(9) 新しい血を入れる

米U B S証券のアナリスト、チャック・ブラッドフォード氏は「鉄鋼業界は、米国産業界の中でも新しい血が入っていない深刻な業界の一つ」と分析、これまでリクルート活動をしてこなかったツケが回ってきたとしている。米国鉄鋼業界と多角的に手を結んでいる日本の鉄鋼業界も事情は同じ。「鉄は熱いうちに打て」とはいかないようだ。

毎日新聞社 1996.8.26 朝刊 8頁

上記のテキストから慣用句(7)、及び(8)は「新しい人材」を意味していると考えられる。このことから構成要素であるBlut、「血」はこれらの慣用句では「人間・人物」を意味していると考えることができよう。

(10) kaltes Blut bewahren

Balladur, der die schwere Verantwortung für eine Gatt-Krise im eigenen Land tragen müßte, sollten die europäisch-amerikanischen Verhandlungen trotz gegenteiliger Pariser Interessen an Frankreich scheitern, war nicht weniger fest. „Wenn sich nichts auf amerikanischer Seite bewegt,“ sagte er, „wird es kein Einverständnis Frankreichs geben, das ist völlig klar. Mir ist ein Abkommen lieber als kein Abkommen, aber nicht um jeden Preis. „Beim bilateralen Bonner Gipfel, an dem Mitterrand, Balladur und eine ganze Reihe von Ministern teilnehmen werden, wollen die Franzosen ihre Mahnung wiederholen: „Wir müssen kaltes Blut bewahren.“ Sie werden dem Bundeskanzler wahrscheinlich auch sagen, was sie zur Zeit in Paris streuen lassen: „Wir hoffen auf Fortschritte - wir sind nicht optimistisch, aber wir sind auch nicht pessimistisch.“

(Mannheimer Morgen, 11. 1994, Wirtschaft)

## (11) 冷血である

被害者の患者（血友病患者）たちは、いま五日に一人ずつ死んでいる。いつまでも争い続けていると、原告団は全員死に絶えてしまう宿命にある。そのため不本意な和解を余儀なくされているのである。殺人行為を謝罪もせず、全員死滅を待望している製薬会社と厚生官僚は、麻原彰晃被告以上の「冷血」であろう。

毎日新聞 1995.11.6. 夕刊 6頁

上に挙げた慣用句はテキストの中で、それぞれ(10) *leidenschaftlich, sehr temperamentvoll sein*, (11) 「冷淡、冷酷である」を意味している。上記の慣用句においても構成要素「血」が中核的な意味機能を果たしていると考えられることができる。しかもこれらの慣用句の場合には、Blut「血」という構成要素は「感情を表す器官」という比喩性を認めることができ、この比喩性は、ドイツ語と日本語の慣用句において共通して認められる。

## 1.2 慣用句の具象性

慣用句の表す意味は、構成要素の比喩性だけではなく、慣用句の具象性によっても作り出される。具象性とは、一般に、慣用句の構成要素が表す文字通りの意味によって示される事柄と理解される。

- (12) große Augen machen
- (13) Augen zudrücken
- (14) die Nase hoch tragen
- (15) seine Nase in etwas hineinstecken
- (16) Elefant im Porzellanladen
- (17) ins Wasser fallen
- (18) 目を丸くする
- (19) 目をつぶる
- (20) 鼻を高くする
- (21) 首を突っ込む
- (22) 水泡に帰す
- (23) 顔をほころばせる

例えばドイツ語慣用句(12) *große Augen machen*は、「大きな目を作る」という具象性を示しており、この具象性に基づいて慣用句的な意味 *staunen, sich wundern*が生じていると考えることができる。これは驚いたときに目が通常よりも大きく見開くということと関係していると思われるが、このドイツ語慣用句には日本語慣用句(18)「目を丸くする」が対応している。(18)の具象性においても「目の形を変化させる」ことが問題になっており、この具象性から慣用句的な意味「びっくりして目を大きく見開く」が導き出されているのである。このように(12)と(18)は、「目の形を変化させる」という共通する具象性を示しており、しかも慣用句の表す意味も同じである。この慣用句では、構成要素である *Augen*、「目」が慣用句の表す意味の中で中心的な役割を果たしていると考えられるが、この場合には、構成要素 *Augen*、「目」の表す比喩的な意味により慣用句的な意味が生じていると言うよりも、慣用句の表す具象性により慣用句としての意味が導き出されていると考えることができる。

ドイツ語慣用句(13) *Augen zudrücken*と日本語慣用句(19)「目をつぶる」についても、「目の状態を変化させる(つぶる)」という具象性により、慣用句的な意味「過失や欠点に気がついても黙って見逃す」が生じていると考えることができる。この場合も、構成要素 *Augen*、「目」の比喩性というよりは、具象性が慣用句的な意味を形成する際に、中核的な役割を果たしていると考えられる。

さらにドイツ語慣用句(14) *die Nase hoch tragen*と日本語慣用句(20)「鼻を高くする」についても、用いられている構成要素及び具象性において日独慣用句の間に対応関係が認められる。この場合は、「鼻の形状を変化させる(高くする)」ことから「面目を施すようなことをして得意になる」という意味が派生されていると考えられる。

一方、ドイツ語慣用句(15) *seine Nase in etwas hineinstecken*と日本語慣用句(21)「首を突っ込む」は共に「興味や関心を抱いてそのことに関係したり仲間に加わったりする」を意味し、慣用句の表す意味は共通しているが、具象性には違いが認められる。即ち用いられている構成要素が異なっているのである：(日本語「首」、ドイツ語 *Nase*「鼻」)。しかしながら「首」と「鼻」は、どちらも身体部位であり、「身体部位をある状態にする」という比較的広い具象性を設定すれば、日独慣用句は具象性においても共通することになる。また、ドイツ語慣用句(17) *ins Wasser fallen*と日本語慣用句(22)「水泡に帰す」についても、具象性及び慣用句の表す意味どちらについても共通している。この場合も慣用句的な意味には *Wasser*、「水泡」という構成要素の比喩的意味ではなく、



慣用句の具象性「水の中に落ちる」が関与していると考えられる。

ドイツ語慣用句(16) *Elefant im Porzellanladen*についても、構成要素 *Elefant*「象(図体の大きいもの)」と *Porzellanladen*「陶磁器店(壊れやすいものがたくさん並べられている場所)」が表す具象性「陶磁器店の中の象」から、慣用句としての意味 *durch Ungeschicklichkeit Unheil anrichten*が生じているといえる。

以上のように、慣用句としての意味を生じさせている要因として、構成要素の比喩的意味と並んで、慣用句の具象性を挙げることができよう。

### 1.3 構成要素の比喩性と具象性

慣用句的な意味を成立させる要因として、構成要素の比喩性と慣用句の具象性の両者が関与している場合がある。

#### (24) 尻尾をつかむ

いつもうまく逃げられてはいるが、今度という今度は彼の尻尾をつかんでやるぞ。

井上(1992) 307頁

#### (25) 尻尾を出す

警察の根気よい追及によって、犯人もとうとう尻尾を出した。

井上(1992) 414頁

上に挙げたテキストの中でこれらの慣用句は、それぞれ「尻尾をつかむ」(隠し事やごまかし、悪事などが何かの拍子に見破られる)、「尻尾を出す」(動かぬ証拠を押さえて他人の秘密や隠し事を見破る)を意味している。これらの慣用句では、「尻尾」という構成要素が慣用句の中で中心的な位置を占めているといえ、慣用句の表す意味と構成要素との関係から、構成要素である「尻尾」に「隠し事、悪事」というひとつの比喩的意味を設定することができる。しかしながらこの慣用句では、「尻尾」の比喩的な意味だけから慣用句の表す意味が生じているのではなく、「つかむ」、「出す」という動詞も慣用句の表す意味の中で重要な役割を演じている。このことは、「尻尾」だけの意味では上記の慣用句の意味を導き出すことができないということからも確認できる。このことから、これらの慣用句では具象性も慣用句の意味に深く関与していると考えることができ

る。例えば (24) では「尻尾 (悪事) をつかむ」、(25) では「尻尾 (悪事) を出す」という具象性を設定することができよう。即ち上記の慣用句では、構成要素の比喩的な意味と慣用句の具象性の両者が関与して慣用句的な意味を成立させていると考えることができるのである。

(26) Schuppen von den Augen fallen

Papst Hadrian war Realist genug, die Chancen dieser Begegnung richtig zu beurteilen, und so erschien, ausgerechnet zu den Ostertagen, eine königlich-päpstliche Gesandtschaft in Regensburg, um den Herzog an den Vasalleneid zu erinnern, den er Pippin und seinen Söhnen als Fünfzehnjähriger im Wald von Compiègne geschworen hatte. Tassilo muß es *wie Schuppen von den Augen gefallen sein*. Da er aber den Bann des Papstes fürchtete, versprach er, sich im Herbst auf dem Reichstag in Worms einzufinden und seinen Eid zu erneuern. POERTNER, DIE ERBEN ROMS, Roman. Econ Verlag, Düsseldorf, 1964, 41.-70. Tausend (1965), S. 320

(27) 目から鱗が落ちる

…徳之島のハブセンター調べによると、この島で、過去五年間にハブにかまれた人は、九百五十九人 (死者二人) いますが、被害者のうち約五六％は、農作業や歩行中の人。ということは、過半数が日中に襲われている。本来なら、ハブがそのへんをニョロニョロしている時間じゃないのに、なぜだろうと、同センター代表の高橋弘忠さんに聞くと、言下にいわれました。

「そりゃ、人間が行くからですよ」

これで目から鱗が落ちたのです。人間はハブが怖いから、夜の草原なんかへは入らない。そのかわり、日中は「こっちの天下」とばかり、ずかずかとそのすみかへ踏み込んでいって、だからハブも自衛上、ガブリとやってしまう。

毎日新聞 1993.11.11. 夕刊 7頁

最後に、聖書に起源をもつ上記の日独慣用句 (26) 及び (27) について検討してみよう。これらの慣用句は、テキストの中で「解けずに悩んでいた問題を

解決する糸口が、ふとしたきっかけでつかめること」を意味している。ここでは構成要素と慣用句の表す意味との関係からSchuppen「鱗」を「見ることの邪魔をするもの」ととらえ、この構成要素に「問題の解決を阻んでいた原因」というような比喩的な意味を設定することも可能であろう。しかしこの場合も、Schuppen「鱗」の比喩的な意味だけから慣用句全体の表す意味が生じているのではなく、そのような「見ることの邪魔をしていたものが目から落ちることにより、よく見えるようになる」という具象性も慣用句的な意味を成立させるための重要な要素と見なすことができるのである。従って、この慣用句も構成要素の比喩性と具象性の両者が慣用句的な意味の成立要因となっていると考えることができる。

## 2. 結 び

本論では、慣用句的な意味が成立する要因として、慣用句の構成要素として用いられている要素の比喩的意味が慣用句的な意味の中核的役割を果たしている場合、慣用句の具象性に基づいて慣用句としての意味が生じている場合、さらに構成要素の比喩的意味と慣用句の具象性というふたつの要因が関与している場合を、いくつかの日独慣用句を用いて検討した。これらのうち、どの要因に基づいて個々の慣用句の意味が生じているかを明確に判断することが容易ではない場合も少なくない。しかしながら、構成要素の比喩性と慣用句の具象性が慣用句的な意味を成立させる際に深く関与しており、程度の差はあれ、これらの要因が何らかの形で慣用句的な意味の成立に影響していると考えられる。

### 註

1. 慣用句を通常の語結合と区別する特徴としては、イディオム性の他に安定性 (Stabilität)、再生産性 (Reproduzierbarkeit) があるが、これらの特徴について、本論で詳細に論じる余裕はない。慣用句のもつ特徴及びその問題点について、詳しくは、伊藤 眞 (1997) 参照。
2. この日本語慣用句と同じ構成要素をもつドイツ語慣用句として、schmutzige Händ habenを挙げるができる。このドイツ語慣用句は *sich etwas haben zuschulden kommen lassen* を意味し、日本語慣用句「手を汚す」と類似した意味を表している。このように両言語の慣用句のあいだには、構成要素及び意味の間に対応関係が認められるものも少なくない。
3. 従来の研究では、慣用句の意味と構成要素の意味との間に、何ら関連性の認め

られないものはvollidiomatisch, 両者の間に何らかの連想関係の認められるものはteilidiomatischと呼ばれ, ある程度区別されてはいる。しかしながら慣用句の中で多数を占めているteilidiomatischなものについて, 関連性の程度に応じた細分化はなされていない。それは細分化のための客観的な基準の設定が困難であることによる。最近では, teilidiomatischな慣用句同士のみならず, vollidiomatischな慣用句とteilidiomatischな慣用句についても厳密な境界づけを行うことは不可能であるという立場から, 慣用句という類の中心に位置するイディオム性の高い慣用句からその周辺に位置するイディオム性の比較的低い慣用句が放射状に明確な境界線なしに分布していると理解されている。

### 主要参考文献

- Burger, H./Buhofer, A./Sialm, A. (1982): Handbuch der Phraseologie. Berlin, New York (de Gruyter).
- Dobrovolskij, D.(1995): Kognitive Aspekte der Idiom-Semantik. Tübingen (Narr).
- Dobrovolskij, D. (1997): Idiome im mentalen Lexikon. Ziele und Methode der kognitivbasierten Phraseologieforschung. Trier (Wissenschaftlicher Vlg.).
- Drosdowski, G./Scholze-Stubenrecht, W. (1992): Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Duden Bd. 11. Mannheim (Duden) .
- Fleischer, W. (1997): Phraseologie der deutschen Gegenwartssprache. 2., durchgesehene und ergänzte Aufl. Tübingen (Niemeyer) .
- Földes, C. (1996): Deutsche Phraseologie kontrastiv. Helderberg (Julius Groos).
- 伊藤 眞(1991): 慣用句とそのモデル化の試み. ドイツ文学 86号 157-166頁. 日本独文学会.
- 伊藤 眞 (1992): 慣用句の意味構造. 言語文化論集 35号 93-108頁. 筑波大学 現代語・現代文化学系.
- 伊藤 眞 (1995): Bemerkungen zum phraseologischen Wörterbuch für Ausländer. 言語文化論集 40号 109-122頁. 筑波大学 現代語・現代文化学系.
- 伊藤 眞 (1996): Phraseologieforschung. Bildliche Entsprechung zwischen deutschen und japanischen Phraseologismen. ドイツ文学 96号 57-65頁. 日本独文学会.
- 伊藤 眞(1997): 言語の具象性・比喩性・受動性 ～日独慣用句をめぐる～ ヴォイスに関する比較言語学的研究 251-297頁. 三修社.
- 伊藤 眞 (1998a): Klassifikationsversuche und deren Problematik in der Phraseologieforschung. 言語文化論集 46号 181-202頁. 筑波大学 現代語・現代文化学系.
- 伊藤 眞 (1998b): 慣用句の構成要素の分析. 言語の普遍性と個別性に関する記述的・理論的総合研究 45-61頁. 筑波大学 現代語・現代文化学系.
- 井上 宗雄 (1992): 例解慣用句辞典. 創拓社.
- 尾上 兼英 (1992): 成語林. 旺文社.
- Palm, Chr. (1995): Phraseologie. Eine Einführung. Tübingen (Narr).

- Piirainen, E. (1995): Phraseologie des Japanischen. Vorarbeiten zu einer interkulturellen Erforschung von Symbolen in der Sprache. In: Studien zur Phraseologie und Parömiologie. Bochum (Universitätsverlag Dr. N. Brockmeyer). S. 269-304.
- Schemann, H. (1993): Deutsche Idiomatik. Die deutschen Redewendungen im Kontext. Stuttgart/Dresden (Klett)
- 集英社 (1991): ルーツでなるほど慣用句辞典.
- Wotjak, B. (1992): Verbale Phraseolexeme in System und Text. Reihe Germanistische Linguistik 125. Tübingen (Niemeyer).